「日々の理科」（第 303 号） 2015（H27),-5,-1

「２年生・光の的当てゲーム」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

今年度は、２年生の「なかまの時間」（生活科の時間に相当）を、週１時間ずつ担当している。理科的な活動を中心に担当している。２年生が、科学に興味を持ってくれるような活動をいろいろ考えるのは、とても楽しい。最初は、かがみを使った遊びをしてみた。本来は３年生の単元だが、遊びの中からの学びをねらって、２年生の最初で試してみたのだ。

まずは、小さな画用紙に絵を描く。絵を描くのが苦手な子どもには「絵じゃなくても、模様でもいいよ」と伝えると、不思議なぐらいスラスラ描けるようになる。（模様も絵の一種なのだが・・・）

これを筒型にして、のりかセロテープでとめて、「光の的」にする。屋上に持ち出して、適当な場所に置き、かがみで太陽の光を当てる・・・それだけの活動。

自分が作ったものだけでなく、いくつも並べて、友達と一緒に遊ぶ。私は子どもたちの様子やつぶやきを観察していて、いくつかのことに気づいた。

・手で持って移動できるような、小さな鏡は、子どもたちの生活の中にはない。
・意外にも、小さな鏡を手にするのが初めてという子どももたくさんいた。
・「太陽どこ？」ときちんと太陽の位置を意識して光を当てようとする行動が見られた。
・「すわってやったほうがうまくいくよ」・・・これは、手元の鏡を静止させたほうが、的に当てやすいことに気づいているということである。
・「二人で一緒に当てると、真っ白になる」・・・こもれは太陽光（光束）の密度をあげれば、明るくなることに気づいているということである。３年生のねらいにも通じる。
・「的は、日なたよりも日かげに置いたほうが、光が当たるとよくわかる」・・・これは、２年生としては大きな発見。鏡を使うと、日かげにも太陽光をお届けられることへの驚きを感じる。

中には、表面にアルミホイルを貼って、光が当たるとキラキラ光るものもあった。（次回紹介）子どもたちは、休み時間が近づいても夢中で試している。「先生、この鏡、どこで売ってますか？」「この的、家に持って帰っていいの？」といった発言が聞かれた。小さな鏡が、子どもと光を結びつけた、楽しいひと時だった。